新吉原火災と消防機器

この絵は、明治30年3月15日、浅草区新吉原角町 | 番地の引手茶屋から発生した大火(焼損面積 12,400㎡、焼失家屋156戸、死者2人、傷者14人)を素材に、福原星湖という画家が描いたものである。

この絵のなかには、明治30年ごろに使用されていた消防機器等が描かれており、以下、これら機器の導入経過等について紹介する。

〇 消防用救助梯子

絵の中央の建物は、当時としては高層建物であ り、消防用救助梯子と救助袋が描かれている。

消防用救助梯子は、明治の中頃、イギリスから輸入したもので、その諸元は、明治32年3月、東陽堂という出版社が発行した『風俗画報臨時増刊』「明治聖世消防図会」によると、次のようなものであった。

「消防用救助梯子は鋼鉄製で、其長さ六十呎 (約18m) にして、之に同じ長さなるヅック製の細き袋を附着してあり、此袋は、楼上にて逃後れたる者、或は大切な書類器具類を投じ、静かに地上に達せしむ為めに用うるものといふ」と記されている。これは、現在の梯子車の前身となるものである。

〇 消火栓

絵の右側中ほどに、水管輅車と蒸気ポンプが、 また下方には消火栓が描かれている。

消火栓は、東京市の水道敷設工事に並行して、 明治30年代の初めに誕生した。当時の消火栓がど のようなものであったかを、前記の風俗画報から 引用すると、

「消防の利器たる水道消火栓も、日ならずして 完成すれば、消防の方法も、自ずから変遷を見る に至らしむ。出火の報あるや、各消防分署(現在 の消防署)より駆送馬車を繰出し(駆送馬車とは、 水管を搭載せる馬車にして、消防手=現在の消防 士=及び指揮官として消防士=現在の消防司令長または消防司令=一人これに乗る)、各水管置場よりは、手牽輅車を牽き出し(是れは最寄に住事る非番消防手)、各消防派出所よりは、蒸気に動力を入る非番消防手)、各消防派出所よりは、蒸気で動力を決ける。現場に向ふ。現場に向ふ。現場に向ふ。現場に向ふ。現場に向ふ。現場に向いる。地域では、連びでは、地域では、地域では、地域では、地域では、地域では、地域では、水管を拡むことを得り、水管焼點に立る頃、消火栓の根なる塞弁『ボークススパナ』を以て開く時は、水は直ちに水管を燃い、筒先より噴出す。此の水力は、此迄の蒸気での水力と大概同一なり」とある。

消火栓が誕生したことにより、それまでの大火 は姿を消していった。

○ 蒸気ポンプ

東京の消防では、明治17年に初めて蒸気ポンプをイギリスから輸入し、明治32年には国産化に成功した。

蒸気ポンプの国産化は、消火栓の設置と相まって、それまでの腕用ポンプとは比較にならないほどの消火能力を発揮した。

蒸気ポンプにまつわるエピソードとして、蒸気ポンプは馬が引いていたので、当時の消防署には馬小屋があり、現在でもその跡をとどめた庁舎が残っており、獣医を置いていた。

また、蒸気ポンプは蒸気を動力として放水を行うため、消防署の近くで火災が起こった場合は、蒸気が発生するまで20分近くかかるため、火災現場の周辺を何回となく回った後、放水を開始したという話が残っている。

(東京消防庁図書資料室 白井和雄)



新吉原の大火(東京消防庁蔵)

